計）を発明した。文学面では賦の作者として名高く、とりわけ「西京の賦」「東京の賦」（あわせて「両京の賦」）と呼ぶ（『文選巻二・三』）は張衡が十年の歳月をかけて完成させた大作であり、班固の「両都の賦」に学びつつ、当時の王侯貴族の奢侈を諷刺する意を込めたもの。ほかに、同志のいない不運を嘆き理想を求めて旅をする様子を空想的に述べた「思玄の賦」、郷里への愛着と帰隠の志を短編形式で述べた「帰田の賦」などがある。（中略）また「四愁詩」（『文選』巻二十九、『玉台新詠』巻九）は、宦官の讒言にあって左遷された折、時世の乱れを嘆き、心中の憂悶を吐露したものである。

（『漢詩の事典』25頁）

○豈廢田…どうして田を耕すことをやめられようか。（いや止められない）→ 補説③

181 ○秀　…秀でる。ぬきんでる。→ 補説④

182 ○滅　…消える。光が消える。→ 補説⑤

183 ○苟　…一時しのぎの意。動作や状態が「とりあえずの間だけ」「しばらくの間」回避されたり猶予されたりする意味を表し、「いやシクモ」「かりそめニ」と訓読する。（『大漢和辞典』）

○營々…あくせくと働くさま、利に馳せるさま。

また、この語に対して『漢語大詞典』では、「象声詞」と説明し、つぎの用例を挙げる。

［『詩経』小雅・青蠅］營營青蠅、止于樊。朱熹集傳、營營、往来飛聲、乱人聴也。

▼「『青蠅の興すもの』として、ぶぅんぶぅんと羽音を立てて飛び回る青蠅は、人に嫌われるいやな虫として佞人・讒人にたとえられる。それはうるさくつきまとわり、目の前を行ったり来たりすると、白いものを汚して黒く汚してしまう。いつの世にも権力者の周りに群がり、つきまとうこれら青蠅のよ